

中村哲先生の思い出

安岡, 昭男 / YASUOKA, Akio

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

270

(終了ページ / End Page)

271

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002667>

中村哲先生の思い出

安岡 昭男（法政大学名誉教授）

法政大学沖縄文化研究所の中国福建省国際学術調査団は一九九〇〜九一年、上海経由、厦門、福州、泉州、杭州、蘇州など中国各地を巡訪したが、団長は中村先生であった。十余人の団員たちは食事といえば円卓二つを囲むのが常だが、副団長・所長だからというわけでもなく、私はいつも中村団長の隣の席になってしまふ。談論風発の先生なので皆に話しかけられるが、やはり隣席らしくお相手する形での、一七日間の旅であった。

紛争期の大学総長として、学生たちとのいわゆる「団交」は少くとも八回におよんだと伝えられている。よく透る声で凜乎として対応する姿は教員たちには頼もしく映じた。私の場合は58年館二階の教授室に拉致拘束され、数時間ほどんど緘黙で通したか、夜八時過ぎ頃かに、解放されて一階の事務室（庶務課か）まで付き添われると、中村総長が待機しておられた。これこそ生涯忘れ得ない思い出となっている。

「団交」は学生相手だけでなく、様子は違ふが、教職員組合による交渉でもおこなわれた。常務理事に在任中のことである。私も組合員なので出席していたが、中村理事は机上に洋書数冊を積み、応対の合間には頁をめくりかねない風であった。事務的な折衝の場にのぞんでも、あくまで研究者としての姿勢を示そうとされたのである。

専攻主任の時に列した大学院の入学式（69年館）で、中村総長の式辞は豊かな学殖から話題は多岐にわたり示唆に富み、余人の及ばない語り口と感じたものである。

時期を遡ると、院生の当時から、中庭のプレハブ仮設教室で、先生の講義を受けたことを記憶している。教職科目と

しての憲法であったろう。音吐朗々、何も見ずに、区切りをつけながら口述されるのを筆記すると、見事に整った文章になっている。内容は覚えていないが教場と講義ぶりの印象は、今でも鮮明によみがえる。

ほかにも大学史資料委員会で聞き取りに参上した御宅でや、卒業生から橙門会展の案内をもらって出かけた京橋の東京近代美術クラブ画廊などと、先生に接しての思い出は尽きない。人間的魅力に溢れる先生の温顔が目に見えぬ。

(二〇〇三年一月二四日)